

浮気妻の制裁

第四卷 禁断のデリバリー

海老沢 薫 著

## 内容

- 著作権について
- まえがき
- 第一章 四つん這いの若妻
- 海老沢薫 BLOG
- 海老沢薫 Web連載小説

※ 海老沢薫 BLOG

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 『羞恥』『露出』『辱め』をテーマにした小説シリーズや、各種コンテンツ情報などを配信。

■ 著作権について

「浮気妻の制裁 第四巻 禁断のデリバリー  
（以下本書と表記する）の著作権は「海老沢  
薫」にあります。

・ 本書のすべての内容は、日本の著作権法、  
及び国際条約によって保護されています。

・ 「海老沢薫」が事前に書面をもって許可し  
た場合を除き、本書の一部、または全部を、  
あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子フア  
イル、ビデオ、テープレコーダ）により複  
製、流用、転載、転売することを固く禁じま  
す。

・ 著作権の侵害につきましては、著作権法第  
61条などの罰則がありますのでご注意ください  
い。

■ まえがき

隣家に住む中年主婦、麻子の命令で、ピザのデリバリーで家にやって来た若い男を素っ裸で出迎えた若妻、萌々。

萌々は欲情を抑えきれなくなった男に体を弄ばれ、あろうことか玄関で絶頂してしまおう。しかし、すっかり興奮した様子の男はそれだけで飽き足らず、尚も若妻の体を執拗に弄び続け、萌々を乱れ狂わせる。

すると、それまで部屋の奥からずっと様子を見守っていた麻子が見かねた様子で玄関へとやって来て、男の前で若妻に屈辱的な罰を与えた。

「萌々ちゃん、アナタもアナタよ、見ず知らずの男の人の手でイクなんて信じられない。罰としてここで四つん這いになりなさい！」

麻子がそう命じると、逆らう事のできない萌々は見ず知らずの男の方に尻を向け、メス犬のように四つん這いになった。

而して、哀れな若妻は麻子の指示で自分で

も見たことのない体の部位を男の前におもいきり晒し、さらには股覗きの恰好で笑顔を振りまきお尻を振らされるのだった。――すげえ、○○の穴と○○を見せながら笑ってる！――

男は珍しい見世物に歓喜の雄叫びを上げ、食い入るように若妻の痴態を見つめた。あああっ、どうしよう・・・こんな恥ずかし過ぎるわ・・・引きつった笑顔を股の間から覗かせながら、心の中で羞恥に泣き叫ぶ萌芽。

妖しい快感に溺れ始め、それに気づいた麻子によつて、さらなる辱めを受けることになる。萌芽は廊下に脚を大きく広げて座らされる。と、見ず知らずの男の顔を見つめながら自ら手で体を慰め始め・・・。

若妻の美貌はだんだん淫らに染まり、やがてその時は訪れた。

「あああん、見ないで・・・ああっ、イク  
っイクっイクっイクううう」  
玄関に若妻の断末魔の喘ぎ声が響き渡り、  
萌々は見ず知らずの男の顔を見つめたまま果  
てたのだった。  
それから暫くして、快感の余韻から覚めた  
萌々の前に、麻子が用意した新たな羞恥地獄  
の扉が開かれようとしていた。

■ 第一章 四つん這いの若妻

二十四歳の若妻、萌々は玄関にしゃがみ込み、肩で息をしながら恍惚とした表情を浮かべて快感の余韻に浸っていた。

家に上がり込んできた隣家の主婦、麻子の命令で、萌々はピザのデリバリーで訪れた男の前に素っ裸で現れ、自分の体の感想を聞かされた挙句、男に乳房を揉んでくださいとお願いまでさせられたのだった。そして、欲情を抑えきれなくなっていた男の手で乳房だけなく、秘部に指まで挿入された萌々は、あろうことか玄関で絶頂してしまふことになった。

部屋の奥からその様子をスマホで撮影していた麻子は満足そうな笑みを浮かべながら、未だもう少し様子を見守ることにした。

「アンタ、随分と派手にイクじゃねえか。よっぽど欲求不満なんだな。それならもつと俺が楽しませてやるよ」

デリバリーの男はそう言うのと、しゃがみ込ん

だ 萌々の腕を引っ張って無理矢理立ち上がり  
せ、若妻の裸身を肩で支えながら強引にキス  
をして再び乳房を弄り始めた。  
「・・・」  
男にキスをされ口を塞がれてしまった萌々は  
泣き叫ぶこともできず、ただ体をバタつかせ  
て抵抗するだけだった。  
しかし、一度火の付いてしまった若妻の体  
はすぐに快感の波に溺れ、抵抗する力は次第  
に失せていった。  
「こんな濡らして、玄関がアンタの汁塗れ  
になっちゃってしまっぜ（笑）」  
男は重ね合わせた唇を離すと、萌々の秘部に  
挿入した指を取り出し、萌々の目の前に掲げ  
て見せた。  
「いやぁん」  
萌々は男の指にベツトリと付着した自らの蜜  
を見ると、顔を真っ赤に染めてすぐに目を背  
けた。  
「あぁん、あぁん」



男が再び指を秘部に挿入して弄り始めると、  
萌々ははしたない喘ぎ声を上げながら悶え狂  
った。そしていつしか、萌々は男の手に身を  
預け、再び快感の頂へ昇り詰めていこうとし  
た。  
そうして、萌々が再びイキかけたその時だ  
った。それまで部屋の奥から様子を窺ってい  
た麻子が突然、玄関の方に歩いてきたのだ。  
「お楽しみのところ悪いんだけど、もう止め  
てくれないかしら」  
麻子はデリバリの男に向かってそう呼び掛  
けた。  
男は部屋の奥から突然現れた中年女性に驚  
き、その貫禄ある風貌に圧倒されたのか、す  
ぐに若妻の裸身を弄る手を止めた。  
「あああん」  
その瞬間、萌々は悲しそうな喘ぎ声を放ち、  
麻子の方を恨めしそうに見つめた。  
「その代わりお兄さんに良いものを見せてあ  
げるわ」

麻子は二人の目の前までやって来ると、そう  
言つて男に微笑みかけた。  
デリバリーの男は配達に訪れた家で裸の女  
を強姦していたことを警察に通報でもされる  
のではないかと怯え、麻子の前で直立不動に  
なつていた。  
「萌々ちゃん、アナタもアナタよ、見ず知ら  
ずの男の人の手でイクなんて信じられない。  
罰としてここで四つん這いになりなさい！」  
麻子はすべて自分が仕組んだことにも関わら  
ず、デリバリーの男の手で快感に溺れてしま  
つていた若妻を叱責した。  
「そんな・・・」  
萌々は、見ず知らずの男の前で自分を辱めよ  
うとする麻子が許せなかつた。  
しかし、麻子に逆らう事ができない以上、  
萌々は恥ずかしくてもやるしかなく、男の方  
に尻を向けて玄関の床に四つん這いになつた。  
「両膝を浮かせて、腰をもつと高く掲げなさ  
い」

麻子がそう命じると、萌々は命じられるまま腰を高々と掲げ、男に向かって私のお尻の穴をどうぞ良く見て下さいと言わんばかりのポーズを作った。「オオッ」

目の前に晒された美女の尻の穴を見た男は思わず驚きの唸り声を上げた。

「美人のお姉さんのお尻の穴はどう？」

麻子は悪戯っぽく微笑みながらデリバリーの男に問い掛けた。

「と、とっても綺麗ですけど、なんだか厭らしいです」

男は萌々の尻の穴をじっと見つめながらそう感想を漏らした。

「いやぁん・・・お願い見ないで」

萌々は男のギリギリした視線がお尻の穴に突き刺さるのを感じ、その視線から逃れようと思わず四つん這いのまま尻を左右に振り乱した。

「ちよつと、いくらお尻の穴を男の人に見ら

ア ナタ っ て 本 当 に 欲 求 不 満 な の ね ( 笑 )  
「 ま あ 嫌 だ わ 、 ア ソ コ が ビ シ ョ 濡 れ じ ゃ な い  
美 女 の 二 つ の 穴 を ギ ラ ギ ラ し た 目 で 見 つ め た  
デ リ バ リ ー の 男 は 再 び 驚 き の 唸 り 声 を 上 げ 、  
「 オ オ ッ 」  
の 穴 の 両 方 が 晒 さ れ る こ と に な っ た 。  
る 羽 目 に な り 、 男 の 目 の 前 に 若 妻 の 秘 部 と 尻  
た た め 、 結 局 、 両 脚 を 肩 幅 よ り も 大 き く 広 げ  
を 開 く の を 止 め る と 、 麻 子 が 容 赦 な く 叱 責 し  
し く て 堪 ら な か っ た 。 そ し て 萌 々 が 途 中 で 脚  
向 か っ て お も い き り 晒 す こ と に な り 、 恥 ず か  
ま 両 脚 を ゆ っ く り と 左 右 に 開 い て い っ た 。  
麻 子 が そ う 命 じ る と 、 萌 々 は 四 つ ん 這 い の ま  
見 て も ら い な さ い 」  
「 そ れ じ ゃ あ 両 脚 を も っ と 開 い て 、 ア ソ コ も  
恥 に 襲 わ れ 、 慌 て て 尻 を 振 り 乱 す の を 止 め た  
麻 子 が そ う 言 っ て 笑 う と 、 萌 々 は さ ら な る 羞  
の は や め な さ い ( 笑 )  
れ て 嬉 し い か ら っ て 、 お 尻 を 振 っ て 挑 発 す る

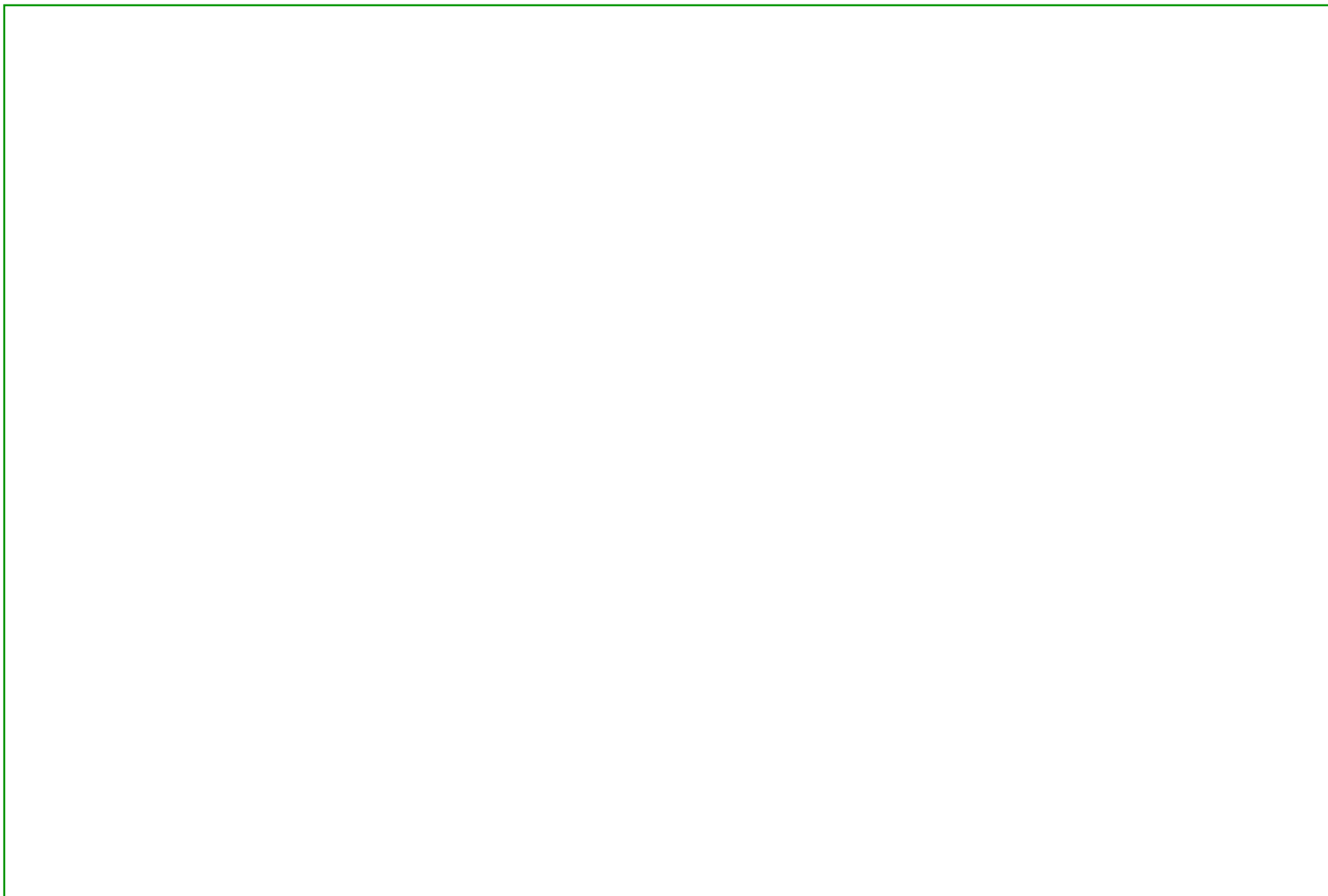
麻子も男と一緒に若妻の二つの穴を覗き込み、呆れたようにそう言い放った。  
「ああん、ごめんなさい・・・」  
濡れた秘部を見られた萌々は思わず謝った。  
別に萌々が謝る必要などまったくなかったの  
だが、若妻は淫らな自分を責められているよ  
うに感じたのかも知れなかった。  
「お兄さん、もつと顔を近づけて近く見てあげて」  
麻子がそう言うのと、デリバリーの男は遠慮なく萌々の尻に顔を近づけ、二つの穴にギリギリした視線を這わせた。  
「これでもつと良く見えるでしょ」  
麻子は萌々の横に立つと、若妻の尻肉を両手で掴み尻の割れ目を左右に押し広げていった。  
「ああっ、いやあん」  
尻の割れ目をパツクリと開かれてしまった萌々は激しい羞恥に喘いだ。  
「すげえ、めっちゃエロい」  
男は興奮した様子で、よりあからさまになっ

た二つの穴を眺めた。  
萌々は自分でも見たことのない体の部位を  
見ず知らずの男に鑑賞されていることが信じ  
られず、四つん這いのまま軽い目眩を覚えた。  
若妻の秘部からは蜜が止めどなく溢れ出て床  
に滴り落ち、それを見た男は欲情をさらに滾  
らせた。  
フフツ、とつても恥ずかしそうね、でもま  
だこれくらいじゃ許さないわよ。。麻子  
は心の中でそう呟くと、四つん這いの若妻に  
向かってさらなる屈辱のポーズを命じた。  
「それじゃあ、四つん這いを止めて自分の手  
でお尻の割れ目を開きなさい！」  
麻子がそう告げると、萌々は表情を強張らせ  
男はニタツと微笑んだ。  
「さあ早くやりなさい！」  
麻子が若妻の尻を引っぱたいて急かすと、  
萌々は羞恥に震えながら一度上体を起こした  
後、両手を尻の方に伸ばして尻肉を掴み、そ  
のまま尻の割れ目を左右に広げていった。

「後ろを振り返って彼に『私の穴という穴を  
どうぞ良く見てください』って言ってからお  
尻を後ろにおもいきり突き出していきなさ  
い！」  
麻子の命令は容赦なく、萌々は両手で尻の割  
れ目を広げたまま後ろを振り向いた。  
「いやぁん」  
背後に立つデリバリーの男と目が合った萌々  
は恥ずかしくて堪らず喘ぎ声を漏らした。  
男の顔には邪な笑みが浮かんでおり、こん  
な相手に対して屈辱のセリフを吐かなければ  
いけないのかと思うと、萌々はやるせない気  
持ちになった。  
「さぁ早く言いなさい！」  
萌々が羞恥に震えながら黙り込んでいると麻  
子が厳しい口調で叱責した。  
「私の・・・あ、穴という穴を・・・どうぞ  
良く見てください」  
萌々は屈辱に顔を真っ赤に染め、震える声で  
そう告げると、両手で尻の割れ目を広げたま

ま男に向かって尻を突き出していった。  
デリバリーの男はまるで夢を見ているよう  
な気分だった。めったに遭遇することのない  
美女が全裸で自らの前に立ち、自分の穴を見  
てくれと頼んできて、目の前でお尻を突き出  
しているのだ。これが夢なら一生覚めないで  
欲しいと男は願った。  
麻子の命令はどんどんエスカレーターしてい  
き、萌々は両脚を肩幅より広く開かされると  
そのまま上体を前に倒していき股の間から顔  
を出し、背後に立つ男に二つの穴だけでなく  
顔まで晒すことになった。いやぁん、お願い  
見ないで・・・。萌々は逆さまになった視界  
に映る男と目が合うと、居たたまれない気持  
ちになった。  
どうぞ私の二つの穴を良く見てくださいと  
言わんばかりに両手で尻の割れ目を広げ、私  
の穴は如何ですかと尋ねるかのように股の間  
から顔を出すその姿は、若妻の人としての尊  
厳を粉々に打ち砕いたのだった。





■ 海老沢薫 B L O G

・ ・ 海老沢薫の最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

■ 海老沢薫 Web連載小説

『 清楚な美人妻 彩 27歳 絵画モデル編 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281>

『 清純派女優 結衣 24歳 国民のペットへと  
落ちていくヒロイン 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802>

『 清純派女優 結衣 24歳 女神の憂鬱 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675>

『 女教師 玲奈 25歳 女性教諭の前代未聞の  
不祥事 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186>

『 美人社長 里帆 26歳 若き女社長のプラ  
イドを砕く屈辱の契約 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885>